

世界最強の怪物が鎮守府に着任しました

宮古ヨッシー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この物語はあの大海賊「白ひげ」がもしも艦これの世界に存在し、さらにはなんと鎮守府の提督になって艦娘たちと毎日をもに過ごしたら、という話です。

基本は日常系のほのぼの話がメインで戦闘シーンはあまりありません。

これは艦隊これくしょんとONE PIECEのクロスオーバーです。

目次

出会い編

始まり	1
鎮守府にて（前）	5
鎮守府にて（後）	10
白ひげ、着任	16
白ひげと大本営	22

## 出会い編 始まり

それはとある海岸にて。

夕暮れ時の海岸は既に薄暗く、人つ子一人さえもない。いたとしてもせいぜいカモメくらいだ。そんな港も船もなく、さざ波の音だけが聞こえるただただ殺風景なこの海岸にて、適当な岩に腰掛けてこの場に居座る一人の男の姿があった。

常人の数倍の体を持ち、立派な白いひげを携えた、筋骨隆々な大男の名はエドワード・ニューゲート。通称「白ひげ」

白ひげのその名を知らぬ者はこの世にいない、この世界において最強と名の轟く伝説の怪物だからだ。若い頃は軍人としてその圧倒的な強さで戦場を暴れまわった白ひげだが、興味がなくなったと言つてまさかの四十代に引退、その後は己の信念に従って自由気ままに生きている。でもその体にはいくつもの傷跡が残っており如何に多くの戦場を駆け抜けてきたかがよく分かる。そして七十を超えた今もその強さは健在なのだとか。

「グラララ、静かな海つてのも久しぶりだ。どうもこの頃の海は何かと騒がしいからな」

「おーい、オヤジ。頼まれたことやってきたよい」  
「ん？ おおそうか、ご苦労だったなマルコ」

突然全身青い炎に包まれた何かが上空から声をかけてきた。特に驚くこともなくご苦労と一言言うと、その何かは白ひげの横へと降り立つ。すると青い炎は徐々に消えていき、一人の男がその姿を現した。マルコと呼ばれたその男は「不死鳥」の異名を持つ実力者であり、そして白ひげの一番の相棒である。

マルコは土産がわりに持ってきた一升瓶を白ひげに渡すと先ほど得た情報で気になっていたことを話し出す。

「それよりオヤジ聞いたか？ 海軍の連中がまたやったそうだよい」  
「ああ、さつき新聞で見た。「艦娘」の件だろ、どうやら軍事費を倍に

するそうじゃねえか。こりやセンゴクの奴も本氣つてわけだ」

二人が話しているのは艦娘と呼ばれる人の姿をした艦船兵器の事である。だが兵器といっても艦娘達は意思や五感を持ち、見た目もうら若き少女達となんら変わりはない。

そもそもこの世界では深海棲艦という謎の強力な艦船によって海での活動権を奪われている。それに対抗すべく人間達の手によって造られたのが艦娘だ。彼女達こそが今現在深海棲艦と互角に渡り合える唯一の手段とされている。

「でも今の人間達が艦娘の力を借りないとロクに太刀打ち出来ないってのは情け無いことだよ」

「まあそう言うなマルコ。今はあの頃みてえに戦場を腕つぶし一つで戦う者はずいぶん少なくなっただけだから。残ってるのは俺やセンゴク、そしてお前ぐらいだ」

何かを思い出しながら語る白ひげ。彼の脳裏には軍人だった頃の記憶が蘇っていた。戦友だったセンゴクと共に戦場を暴れまわり、敵の軍隊と何度も殺し合いをしていた頃を。その後は白ひげの除隊とは逆に、センゴクは己の正義の為に軍で戦い続け、今では海軍のトップである元帥の立場に上り詰めていた。

「まさか本当に元帥になりやがるとはな、センゴク」

「もしオヤジも軍に残ってればなれたんじゃねえのかよ？」

「オイオイ冗談はよせマルコ、俺は地位には興味ねえと言っただろ」

そう言いながら一升瓶の酒をがぶ飲みする白ひげ。その飲みっぷりはとても七十を超えているとは思えないほど豪快。そうだったなと一言言うとマルコもまた自分用に買ってきた酒を飲んでいく。

辺りはすっかり夜になっており空には散りばめられたように無数の星が光を放っている。海岸から振り返れば遠くにぼんやりと街明かりが見えるのもまた、夜を明るく彩ってくれていた。

「さて、どっかでうまいメシでも食っていくか」

「ああ、賛成だよ」

――

馴染みの居酒屋で夕食を終えた二人は街はずれにある空き家で体を休めていた。ここは二人がこの街に行き着いた頃から利用している空き家だ。管理人もだれもおらず、あまり上等ではないが休む程度には充分だった。

少々古びた椅子にそれぞれ腰掛けた二人、話の議題はやはり深海棲艦についてだ。

「本当に深海棲艦ってのは何なんだ。艦娘も不思議だが深海棲艦はそれ以上だよ」

「さあな、だが海へ出るのに不便になったのには違いねえ。奴らに見つかりや船なんざすぐに沈められるからな」

「それが原因で日本が最後の旅路になるとは思ってもいかなかったよ」

「まあ俺としちや別に構わねえがな。グラララ、本気で海へ出たきや力ずくで行ってやる、全部蹴散らしてな」

深海棲艦による突然の強襲が始まったのは今からおよそ五年前、ちよūdō白ひげとマルコが日本に滞在している頃だった。それによつてシーレーンは絶たれ、白ひげ達もまた今は出航を中断している。とは言つても実力行使で渡航できなくはないのだが。

「そーいやマルコ、さつき居酒屋で誰かが言つてた「ブラック鎮守府」ってのは何だ？」

晩飯を食べに寄つた居酒屋で耳にしたブラック鎮守府という言葉が引つかかった白ひげ。名前からして何となくは分かるが詳しくは知らない。ならば情報収集を定期的に行なっているマルコなら何か知つてるのではと踏んで聞いてみる。するとマルコから聞かされたのは白ひげ想像を超えるものだった。

「ブラック鎮守府は普通じゃない提督が治める鎮守府のことだよ。なんでも、艦娘達を人じゃなく只の兵器として扱い、有無を言わさず無理矢理出撃させたり、食事も満足に与えないそうさ。そして最悪の

場合は、轟沈や解体も平気であるそうだよい」

「つたく、とんだハナツたれ小僧がいたもんだ」

「ああ、全くもって解せない奴らだよい」

艦娘の導入によって深海棲艦との戦争は少しずつではあるが優勢になっていき、一部の海域を奪還することにも成功している。だが一方で一部の人間達による艦娘への扱いが酷くなり、提督の横暴によって荒れてきている鎮守府も出てきている。海軍としても士気に関わる為何とか摘発に乗り出しているものあまり成果は出ていない。

白ひげはマルコに聞いたブラック鎮守府について多少なり苛立ちを覚えていた、というより苛立ちを通り越して呆れてさえもいる。それは話した本人も同じらしく、その表情は険しくなっているのが見てとれる。

「俺には関係ないことだが、なんだか胸くそ悪いな」

「それは俺もだよい。悪かったな、こんな話して」

「構わねえよ、元は俺から聞いたことだ」

「そっぴやオヤジ、知ってるか？」

そしてマルコの口から語られたのはまたしても白ひげを驚かせるものだった。だがそれは同時にかつて戦場を暴れまわった最強の怪物を動かすきつかけとなる。

「ここ横須賀の鎮守府もまさに、ブラック鎮守府だそうだよい」

## 鎮守府にて（前）

「ここか、例の鎮守府は」

翌日、横須賀へと姿を現した一つの巨大な影。最強の怪物白ひげは昨日の話題に上がっていた鎮守府へと足を運んでいた。その手には自身の巨体にも劣らない大きな薙刀を持っている、白ひげの愛用している武器だ。

何故あの男が横須賀に、道行く者達はそう思っていただろう。だがその理由は白ひげ本人さえもはっきりはしていない、どちらかといえば直感が彼を動かしたといった方が正しいだろう。白ひげはたまに理屈よりも先に体が動くことがある、それは軍人だった頃からずっと。だがその直感力によっていくつもの壁を乗り越えてきたのもまた事実。

目の前に映る鎮守府は白ひげが思っていた以上に立派だった。新しくはないもののしっかりとした建物に演習に使用するであろう広場。それだけ見ればとても荒れた提督がいるとは思えない。

「どう見ても普通だな。気配の弱さを除けば」

鎮守府から感じられる人であろうつ気配はどこか弱々しいものを感じていた、それが艦娘の特徴なのかもしれないし本当に衰弱しているのかもしれない。それを気配だけで区別するには少々難しい。

すると突然、白ひげの横に誰かが飛び降りてきた。その人物は白ひげの最も信用している相棒、『不死鳥』マルコである。マルコは白ひげよりも一足先に鎮守府の中を偵察してきていたのだ。その名の通り姿を青い炎を纏った不死鳥に変身させて自由に飛行できるマルコにとって偵察などは朝飯前である。

「ご苦労だったなマルコ。で、どうだった？」

「外には誰もいなさそうだったし特に異常はなかった。怪しいのはおそらく中だよ」

「そうか。まあ確かに外にはいなさそうだな」

そもそも白ひげは艦娘という少女達を直接見た事はない、せいぜい新聞に時折載った写真ぐらいだ。マルコは何度か目撃したことは



あるそうだが面識があるわけではない。

「んで、どうするオヤジ？」

「どうするもこうするも、俺は直接乗り込むぞ。ついて来いマルコ」  
そう言うのと鎮守府の敷地内へと進んでいく白ひげ。その横をマルコが周囲を警戒しながらついていく。マルコとしては出来るなら力による解決は避けてほしいところがあつた。というのも七十を超え  
る老齢と持病によつて白ひげは衰弱しており、本来なら安静にしな  
ければならない。

「オヤジ、あまり無茶はするなよい。なんなら俺が…」

「バカヤロウ、俺が行くと決めたんだ。体のことなら気にするな」

しばらく辺りを散策ながら進んでみるもやはり変わったところはない。それこそ静かすぎる事を除けばだが。

そして何もなままとどうとう建物の前までたどり着いた二人。だが問題はここからである、勿論その事を二人は知っている。弱々しい気配は建物の中から感じるのだから。

中へ入るとそこは外とはまるで違う世界だつた。燃料や硝煙の混ざつたような匂いが鼻をつく、それはまるで戦場にでもいるかのよう  
な気分させる。それだけではない、壁や床も所々穴が空いていたり  
窓ガラスが割れていたりとなかなか荒れている。

「こりゃあ酷エな。まさにブラック鎮守府というべきか」

流星の白ひげもこの現状には少々驚いていた。外觀がわりと綺麗  
だっただけにこの差は誰でも面喰らうだろう。それはマルコも同じ  
で目の前の光景に啞然としている。

「そうだな…ん？ 何だ」

マルコが通路の奥へと視線を向ける。ふらふらとおぼつかない足  
取りで誰かが歩いてくる。よく見るとそれは学校の制服のような服  
装をした銀髪の少女だつた。

「マルコ。もしかしてあれが」

「ああそうだよいオヤジ、あれが艦娘だ。おいお前、ちよつといいかよ  
い」

「えっ!？」

不意に声を掛けられた少女はビクツと驚き腰を抜かしてしまっていた。その目は驚きと困惑に包まれているのがよく分かる。マルコは少女の前まで近づくと腰を下ろして視線を下げる。よく見ると体のあちこちに傷跡が残っているのが見てとれた。

「あく、驚かして悪かったよ。実はちよつと聞きたい事があつてな。お前、艦娘だろ？」

「だ、誰なんだい君は？ 見た所人間みたいだけど」

「俺はマルコってんだ、よろしく。それで後ろにいるのが俺のオヤジ、白ひげだよ。ところでお前の名は」

「…ひ、響だ」

響はあまりの急な事態に驚きながらも何とか声を絞りだす。艦娘である彼女も白ひげの存在は知っていたらしく、突然の出来事に頭が回らなくなっていた。無理もないかとマルコは思わず苦笑する。

「まあ安心しろよ、別にお前を襲いに来たんじゃない。むしろ助けに来たと言ったほうが正しいよ」

そう言つて手を差し伸べるマルコ。でもその少女はその手を掴もうとはしない、まるで何かに怯えているようだった。

「君は何を言ってるだ。どうして私達なんかを助けようとするの？」

「ん、何というかオヤジの気まぐれだよ。それに俺達はお前から艦娘を兵器だとは思っちゃいない、むしろ普通の少女だと思ってるよ」

○マルコから発せられたその言葉を響は理解することは出来なかった。少なくともこの鎮守府ではまずあり得ない認識だからだ。この提督は艦娘を只の兵器として扱い、まるで人間として見てくれなかったからだ。それを目の前の男達は何の躊躇もなく人だと言った。それは響にとって思つてもみない事だった。

「おいマルコ。とりあえず詳しい話はそいつの手当てをしてからでいいんじゃないか？ 派手にやられるみてエだし」

「それもそうだな。響、入渠用のドッグはどこにあるんだ？ ○確か艦娘は入渠で傷を治せるんだっつたよな」

以前に艦娘について調べたことのあるマルコは多少なり知識が

あった。勿論完璧に全て知っているというのではないが艦娘の治療法は入渠という事くらいは知っていた。

「…入渠は司令官の許可なしでは使えない。それに資材が勿体無いとか言つて滅多に入渠させてくれないんだ」

その言葉はブラック鎮守府の本質を思い知らされるには充分過ぎる、マルコもつい言葉を失つてしまう。でもこのまま放っておくわけにもいかない。すると後ろに立っていた白ひげが口を開く。

「おい小娘。司令官つて奴ア何処にいる」

急に声を掛けられたので思わず飛び上がりそうになる。

「えっと、あ、あの…に、二階。ちょうどほぼ真上の部屋だよ」

「そうか分かった。マルコ、そいつはお前に任せるぞ。俺アちよつと行つてくる」

そう言い残すと白ひげは二人を横切つてそのまま奥へと進んでいった。一体急にどうしたのか、響は気になってしようがなかったがマルコには大方の予想はついていた。だからマルコは気にする事なく響に向き合う。

「じゃあ俺達もそろそろ行くよ。それでドッグは何処なんだ？」

「さつきも言ったよね。司令官の許可なしでは使えないつて」

「そんなのどうだつていいよ。まずはお前の命が大事だ」

マルコはお構いなしに響を抱き抱えるとスタスタと歩き始めた。全く予想だにしない展開にますますついていけなくなる。下ろしてもらおうとジタバタ動くもマルコは見た目よりも力が強く、逃げるのは無理だと分かると大人しく諦めた。

「初めてだよ。君達みたいな変わった人間に出会つたのは」

「そうなのか、まあこれくらいは普通だよ。それより道はこつちであつてるのか？」

「うん。このまま真っ直ぐ行つて突き当たりを右に曲がつた先にある」

少しだけならこの男達を信じてみてもいいかもしれない、響はマルコにここの司令官とは明らかに違うものを感じていた。

二人がドッグへと向かっている中、何者かが二人をこつそりと後を

つけていた。人数はおよそ二、三人くらい、マルコはおそらく気づいているだろうが特に気にしてる様子はない。

「はわわわ、響ちゃんパイナップルの人に連れて行かれたのです」

「一体何なのよ、あのパイナップル頭」

「と、とにかく追いかけるわよ。仲間を助けるのは一人前のレディーとして当然なんだから！」

「マルコの髪形をパイナップルみたいだと揶揄する三人はそう言う  
と二人を追いかけていった。」

## 鎮守府にて（後）

「さて、着いたはいいが。これは何だよい」

「決まってるじゃないか、これが入渠ドッグだよ。私も久しぶりに来たけど」

「いや、どう見ても風呂じゃねえかよい」

目的地である入渠ドッグへとたどり着いた二人、でも目の前に広がる光景はまたしても予想の斜め上をいくものだった。湯船に張られた温かそうなお湯、もくもくと充満している白い湯気がここが浴室である事を教えてくれる。

「私達艦娘はこのお風呂に決められた時間浸かる事で傷を治す事が出来るんだ」

「原理が全く分からん、風呂で治療なんて聞いた事ないぞ」

「私からすれば君達の方がよっぽど不思議なんだが」

「気にするな。とにかく、俺は出ておくからゆつくり休んでこいよい」  
そう言うのと響をドッグに残してマルコはさっさと外へと出ていってしまった。一人残された響はひとまず湯船に浸かる事にする、この後どうするかはそれから考えるつもりだ。どうせまた後で怒られるんだ、そう思いながら久しぶりに入った入渠ドッグ。それは温もりが全身に染み渡り、嫌な事を全てを忘れさせてくれるかのようだった。

「あー、その。それで、お前達は一体何なんだよい。俺に何か用か？」  
「ふえ!? ば、バレてたの!？」

「当然だ、俺を誰だと思ってるんだよい。それにあのつけ方だとすぐにバレるぞ」

響を運んでいる途中に何度か足音が聞こえたし床の軋む音も感じていた。これでは流石に気づかれても仕方ないだろう。

「うっ、そ、それより響をどうしたのよ！ まさかあんた、変な事してないでしょうね！」

「誰がするかよいそんな事。ただ入渠ドッグに連れてつただけだよ  
い」

「え？ そうなのですか？」

「ダメよ電！ こんなパイナツプル男の言うことを信じたら」

「誰がパイナツプルだよい！」

まさかパイナツプル呼ばわりされるとは思ってたらしくマルコは面食らっている。自分の髪型については白ひげからも特に何も言われた事はなく、彼自身も何も気にしていなかった。マルコにとってはある意味新しい発見だった、正直どうでもいいだろうが。

「もし嘘だと思うなら行ってみるといいよ。何ならお前達も一緒に休んできたらどうだ？」

「何言ってるのよ。そんな事したら司令官に怒られるじゃない」

「また司令官か……」

余程つらい目に遭ってきたのだろう、その体は恐怖で震え、言葉からも怯えているのが理解できる。

「とにかく、司令官って奴の事はひとまず忘れて休んでこい」

「あ、あの、どうしてそこまでして休ませようとしてくれるのですか？」

「いや、傷だらけの女の子がいたら休ませるくらい普通だろう？」

「わ、私たちが怖くないの？ だつて……」

「お前たちが艦娘だからか？ 俺は別に何とも思っていないよ。むしろすごい奴らだと感心するくらいだよ」

マルコは以前に海上で深海棲艦と戦う艦娘達を見たことがあり、そのときから大したもんだと一目置いていた。

「それに本気を出した時のオヤジの方がずっと怖いぞ。まあよっぽど  
のことがない限り本気なんて出さないけどな」

「オヤジってさっきの大きなおじいさんの事？」

「ああそうだ、俺の最も尊敬する人だよ。今日ここに來るって決めたのもオヤジだよ」

なぜ今回鎮守府に侵入したのか、マルコは簡単に説明した。不当な扱いを受けている艦娘たちを放つてはおけなかつた事を。そのマル

「この確かな意志が伝わったのか三人は少し信じてみようという気になっただけだ。」

「じゃ、じゃあ、本当に入渠してもいいんだよね」

「ああ、もしもの時は俺が何とかするよ」

「あ、あの、ありがとう、なのです」

「そう言うことやつとのことです。三人は響のいる入渠ドッグへと走っていった。まさかここまでとは、この鎮守府の闇は思ったより深そうだと実感したマルコ。」

「はあ、これは面倒なことになりそうだよ」

「響っ！ 大丈夫!?!」

「あ、暁、それに雷と電も来たんだね。私は大丈夫だよ、あの人のおかげで」

「湯船でゆつたりと浸かっている響を見て安心したのか、糸が切れたかのようにその場にへたり込む三人。そして響に誘われるがまま湯船に浸かり、久しぶり四人での入渠となった。」

「それにしても、ホント何なんだろうねあの二人」

「でも思ったよりいい人そうだったので。入渠もさせてくれたのです」

「電の言うとおりにね、あの人はいままで会った人たちとは違うわ」

「わ、私も一人前のレディだからもちろん分かるわよ」

「暁、それレディ関係ないよね」

「久しぶりに四人一緒にゆつくりできたということもあってか話も自然と盛り上がりつつある。この時ばかりは嫌なことを忘れてリラックサできているようだ。それでも四人とも一抹の不安は払拭できずにいた、もしかしたらまたあの生活に戻ってしまうのではないかと。」

「だ、大丈夫よね。きつと」

「今はマルコさんを信じるしかないので」

「わずかな期待と不安を抱えながら四人は入渠ドッグから上がる。」

そしてマルコに頼んでみたいこともあった、それはほかの仲間も入渠させてあげることだった。

—————

ここは司令室。

その名のとおりの鎮守府を仕切っている提督の執務室である。他の部屋とは打って変わって派手に装飾されたこの部屋には軍服を身に着けた提督と思われる中年くらいの男と数名の艦娘がいた。

これまた豪華な椅子に腰かけていた男は誰が見ても分かるくらいに不機嫌だった。その理由は出撃していた艦隊が敗北して戻ってきたからだ。傷だらけで戻ってきた艦娘達は手当てもさせてもらえずにただただ怒号を浴びせられていた。

「全く、一体何度負ければ気が済むんだ！」

「……すみません」

それに対して艦娘達はひたすらに頭を下げている。内心頭にきている者もいるが提督に逆らうことは許されないうために悔しそうに歯を食いしばっている。

そもそもこの提督は艦娘を只の兵器としてしか見ておらず道具のように扱っている。満足に食事もできずただひたすらに出撃ばかりさせられており疲れも取れない。これでは満足に結果を出せないのは当然である。

「とにかく、この後すぐに出撃だ。いいな！」

「ま、待っててください提督。いくらなんでもこれ以上は無理です！」

「少しだけでも休息を」

そうやって男の前に一歩出たのは艦隊の主力である戦艦の榛名、今回の旗艦であり艦娘達からも慕われている。

「貴様、兵器のくせに俺に逆らったな」

男が榛名を殴りつける、この一方的な暴力もまた日常茶飯事となっ



ていた。すると今回の失敗は自分のせいだと言つて重巡洋艦の青葉が榛名を庇うように割つて入る。しかしそれでは当然青葉が暴力を受けることになる。

「司令官、もうやめてください!」

「そうか、お前も逆らうか!」

こうして指令室では提督の暴力と艦娘達の庇いあい毎日のように行われている。それを隣の机で悔しさと悲しさを滲ませながら書類整理を行っている艦娘がいる、大淀である。彼女はいつもこの光景を目の当たりにしている。そして本人もまた体中あざがたえない。

「もううんざりだ、こうなったらお前ら解体してやる!」

その瞬間だった。

爆発に近い音が司令室に響き渡る、それには艦娘ばかりでなく提督までもが驚きを隠せない。特注で作ってもらった司令室の扉がいつも容易く吹き飛ばされたからだ。

「グラララ、随分といきがつている小僧がいるみてえだな」

部屋に入ってきたのは白く立派な髭を携えた一人の大男。その男を見た瞬間提督の表情が一変した。

「ひっ、し、白ひげ!! ど、どうしてここに!?!」

「なんだ、俺を知ってんのか」

「あ、あああつ」

提督は恐怖で震え腰を抜かしていた。今日の前にいるのはまぎれもなく世界最強と謳われた男、白ひげだからだ。

「で、お前は今何をしてたんだ?」

「えっ、あ、いや、それは……」

「テメエの体で海へ出る覚悟のねえ奴が、調子に乗ってんじゃねえよ! ハナツタレが!」

「ひいひいっ」

薙刀の柄を床へと叩きつけてひと睨み、凄まじい殺気と覇気の込められたその一声で提督はあっさりと気絶してしまった。そして白ひげは倒れた提督の胸ぐらを掴んだかと思えば外へ放り投げてしまった。

「つたく、とんだハナタレボウズがいたもんだ。で、お前らが艦娘だな」

「は、はいっ。私は榛名といます」

あまりに突然のこと過ぎて榛名達は頭が回らずにいた。いきなり只者じゃない男が現れたかと思えばあの嫌な提督を倒してしまったのだから。

一つ分かるとすれば、この男は自分たちとは比べ物にならないくらいに強いということくらい。

「あの、どうして私たちを助けてくれたのですか？」

「ん？ ああ、あの小僧が気に入らなかつただけだ。気にすんな」

「気まぐれって……、でもお前、何か裏があるんじゃないのか？ でなきゃこんな事しない筈だ」

眼帯を付けた軽巡洋艦天龍が警戒しながら聞いてきた。

「そ、そうですよ。あ、青葉もあなたをし、信用できません」

「ちよ、ちよつと二人とも!？」

白ひげは思わずため息をついた。想像以上に艦娘達の人間への不信感や恐怖心があったからだ、でもその恐怖心の一端がまさか自分にあるうとは白ひげ本人も思ってもいないだろう。

「グラララ、まあいいだろう。そういや通信室はあるか？」

「あ、えつと、でしたらこちらの通信機で鎮守府内全体に放送できます」

榛名達と同様に現状を飲み込めずにいた大淀が慌てながら通信機を持ってくる。それを受け取ると白ひげは鎮守府中に聞こえるくらいの大声を発した。

「俺あ白ひげだ。これよりこの鎮守府は……俺の縄張りにする!!」

数秒の沈黙が流れた後、鎮守府全体に艦娘達の驚きの声が響き渡つたのは言うまでもない。

## 白ひげ、着任

白ひげによる突然の縄張り宣言から時間にしておよそ三時間、鎮守府の一角に設立されている大食堂がいつもと違って騒がしくなっていた。この横須賀鎮守府に所属している艦娘達の大半が集まっていたのだ、人数にしてざっと四、五十名ほど。そこには先ほど入渠していた暁、雷、電、響（通称「第六駆逐隊」）の四人や榛名達の姿もあった。

そもそもこの大食堂に集まっているのには訳があった。それは白ひげが放送時に集合をかけたからである。挨拶がしたいから好きな時間に何処か広いところに集まれ、と。でもそれでは流石に大雑把すぎたので正確な時間と場所は大淀が代わりに伝えていたのだが。

その間に暁達の声かけによって久々の入渠を済ませた者も少なからずいた。

「それにしても、白ひげってどんな人なんだろうね」

「私、こっそり見たけどなんか強そうなお爺さんだったよ」

「おっ、お爺さん!? 本当なの島風ちゃん!?」

「榛名っ、その人に会ったのデスカ!？」

「はい。少し怖い感じでしたが良い人でしたよ。みんなを助けてくれましたし」

「ひえー」

「しかし榛名姉様、本当に信用できるんですか？　いくら助けてくれたと言っても……」

艦娘達の話題はやはり突如やってきた白ひげについて。とんでもない怪物だとか大男だとか優しいお爺さんだとか様々。でも大半の者達は白ひげの事を疑っており、さらには前の提督の二の舞になるのではと警戒してる子も少なくない。

「くそっ、何なんだあの男は。あれだけ強い奴がどうして俺達なんかを……」

「確かによく分からないわね。でも安心して、もしも天龍ちゃんに手を出すようなら私が始末するわ」

「やめろ龍田。恐らくだが俺達が東になって掛かっても勝てるか分からない、それくらいヤバイ奴だ」

天龍と彼女の姉妹艦の龍田もまた例によって白ひげの事を話していた。天龍は放たれた殺気によって白ひげという怪物の片鱗を肌で感じていたのでその圧倒的な強さを分かっていた。

艦娘達があらゆる憶測を飛び交わしている最中、遂にその時がやってきた。その一步の歩みは大地でも揺らすのではないかと思われる程に力強く、感じられる覇気は最強だと実感するのに充分すぎる程に鋭い。

白ひげの隣には第六駆逐隊の四人が出会った不死鳥マルコも共にいた。

全員が息を飲む中、部屋全体を見渡せる所へ移動した白ひげがついに口を開いた。

「グララララ、さつきも言ったと思うが俺が白ひげだ。今日からここを俺の縄張りにするんで以後よろしくな」

そう言う白ひげはそのまま部屋を出ようとするが、すかさずマルコが止めに入る。

「お、おいオヤジ、流石にそれだけじゃまずいよ。ちゃんと説明しないと……」

「ん？ ああ、そうか。つまりだ、お前ら全員俺の家族になれ」

「「ええええええ!!」」

「そういう事じゃねえよオヤジイ!!」

それからはマルコが全員に説明を始めた。ブラック鎮守府で辛い目に遭っている艦娘達を助けたかった事、その為に鎮守府に直接乗り込んで提督を倒した事、そして代わりに自分達がこの鎮守府を仕切る事を。

ちなみにここに配属されていた憲兵達は白ひげを見るなり一目散に逃げ出したのだとか。

「鎮守府の知識については俺もオヤジも元軍人だったから問題ないよ

い。それで家族になれって事だが、オヤジは自分の仲間の事を家族として何より大切にしてくれるんだよ。だからオヤジは俺を息子と呼んでくれるし俺もオヤジと呼んでいるんだ」

「えっと、あの、つまり白ひげさんは私達を仲間にするという事ですか？」

駆逐艦吹雪が手を挙げて恐る恐る聞いてきた。

「そういう事だよ。まあお前らの場合は息子じゃなくて娘だけだな」

その瞬間艦娘達がざわつき始める。それぞれ色々と思うところあるが、何より驚いているのは自分達を兵器ではなくて人として、何より家族として扱うと言った事だった。

「悪いが、そんな話信じられないな」

そう言っただけで立ち上がったのは戦艦の長門。この艦隊の主力の一人でありみんなをまとめるリーダー的存在でもある。その隣には同じ戦艦である姉妹艦の陸奥もいた。

「確かに榛名達を助けてくれたり、みんなを入渠させてくれた事に関しては感謝している。だが今日まで人間に酷使されてきた私達は今更お前達の話の信用できると思うか？」

「ん、まあ確かにそうだな。それは無理もないよ」

「だから悪いことは言わない、今すぐここから出て行け。私達とて人間を傷つけたくはない」

長門は既に艦装を装着しており、その砲口を白ひげ達へと向けていた。また長門だけでなく陸奥やその他二人を敵視している者達も同様に戦闘態勢へと入っている。

「お、おい待てお前ら。落ち着けよ」

マルコが慌てて静止させようとするが、長門達はへたな事をすればすぐに撃つと言わんばかりに睨んでいる。一方で第六駆逐隊や榛名など白ひげを信じてみようと思ってる者達もいるが場の空気に気圧されて動けずにいた。

「随分威勢がいいじゃねエか、俺はそういう奴は嫌いじゃないぜ」

それは流石に信じられなかった。大抵の人間なら艦装を見せるだ

けで恐怖したり化け物だと蔑んでくる。だが白ひげは恐怖するどころかむしろ楽しんでるようにさえ見えてくる。彼女達にはそれが理解できない。

「だがお前らの気持ちはよく分かった。よし外に出ろ、望み通り相手をしてやる」

—————

この鎮守府は建物だけでなく敷地もまたそれなりに広く、学校の校庭ほどの広さを持つ広場も設けられていた。その中央付近では白ひげ、そして長門を筆頭とする殺る気満々の艦娘達が集まっていた。でもやはり白ひげを信用してみたいと思う者達（主に駆逐艦と榛名）とマルコは端の方に逸れていた。

「オヤジ、頼むから無茶だけはするなよ」

「分かってらァ、マルココそ手を出すんじゃねエぞ」

マルコが心配しているのは白ひげの容態について。年もとり、病状も悪化しているその身体は限界に近いと言っても過言ではない。

「本当にいいんだな、白ひげ。私たちは全力でいくぞ」

「ああ、全てをぶつけてこい。俺が全部受け止めてやる」

「よし、始めるぞ。一斉射!!」

長門の掛け声とともに艦娘達による一斉攻撃が始まった。主砲という主砲が火を吹き白ひげに集中砲火を浴びせていく。爆煙のおかげで白ひげがどうなっているかは分からないが直撃している事は間違いないだろう。

「オヤジ……」

手を出すなど言われている為にただ黙って見守る事しか出来ないマルコは僅かだが焦りの色を見せていた。まさかここまで徹底的に

やってくるとは思っていなかったからだ。それでも白ひげなら心配ないだろうが。

「そこまで。一旦やめろ」

その一声で砲撃音は止んだ。まだ立ち込める爆煙で姿は見えないが長門達は手応えを感じていた。だが煙が晴れた途端みんなの表情が一変した。

「中々良い攻撃力じゃねエか、流石は艦娘と言ったところか」

「なっ!? 一体どうなっているんだ!」

「全然効いてない!」

「だがこれくらいじゃ俺は倒せねエぞ」

「くっ、撃て! 撃て!」

その後も全員で砲撃を続けるもほとんどを白ひげは薙刀一つで撃ち落としていた。確かに何発かは当たってはいるものの微動だにしない。更に言えば白ひげは全く反撃をしてこない、さっきから受けてばかりだ。

それからおよそ三十分、結局長門たちの方が先に折れてしまった。

「どうした、もう終わりか?」

「ハア、ハア、何で効かないんだ。深海棲艦をも吹き飛ばす主砲だぞ

……」

「長門、もうやめましょ。やっぱり彼は桁違いすぎるわ」

「くそ、悔しいがそうみたいだな。みんな、もういいぞ」

そうして使用した艦装を解除していく、もう彼女たちに先ほどのような殺気はない。ほとんどの者が白ひげという怪物の強さを目の当たりにして戦意喪失してしまっていた。

「まあ、その体調じゃ無理もねエだろ。かなり疲れが溜まってるみてエだしな」

「流石に分かるみたいね」

「当然だバカヤロウ。今度は万全の時にかかってきな」

白ひげにはいくら入渠したとはいえほとんどの艦娘達が疲労困憊だという事は分かっていた。でもそれを知ったうえで決闘を受けたのは彼女たちの意思を感じとっていたからだ。

「……白ひげ。お前への攻撃の件、罰はこの私が受ける。だから頼む、みんなには手を出さないでくれ」

「おい、ちよつと待て。どういう事だア」

「どういう事って、私たちは本気でお前を殺そうとしたんだぞ。だからその代償を受けるのは、」

その瞬間長門の視界が暗くなる。突然の事で理解出来なかったが白ひげに抱擁されているのだと徐々に分かってきた。

「えっ!?!」

「自分の娘に手をあげるオヤジが何処にいる。グララララ、言ったらう、全部受け止めると」

「あ、ああ……」

「お前らが人間を嫌いな事くらい分かってる、別に好きになれとも言わねエ。だがこれだけは覚えておけ、俺ア絶対に家族を裏切らねエ!!」

その時長門は初めて感じるものがあつた、それは身体だけでなく心をも癒してくれる温もり。目の前にいる白ひげはそれは大きく、頼もしく見えた。

「どうやら嘘ではないようだな。分かった、少しお前を信じてみようと思う」

「そうか、そいつアよかつた」

こうして一応長門とは和解でき、ひとまず白ひげの着任騒動は終わりを迎えた。でもまだまだ問題が山積みなのを彼らはまだ知らない。



## 白ひげと大本営

白ひげ着任の騒動から早くも一週間が経過した。

着任した当日こそ相当な荒れ具合ではあったものの今はだいぶ落ち着きを取り戻している。白ひげに対するみんなの反応は様々、一部の者はある程度信頼しているもののまだまだ疑っている者も多い。

そして現在、白ひげとマルコの二人は執務室にてとある小さな存在からその事についての報告を受けていた。

「やっぱりそう簡単に上手くはいかねエか。おめエもご苦労だったな、ゆっくり休んでろ」

その小さな存在は白ひげの言葉にペこりと頭を下げるとそのまま執務室を後にした。

「まあ無理もないよい、むしろ一週間でよくここまでできたんだからすごい事だよ」

「ああ、全くだ。まさかここまで出来るとは、流石は妖精と言うべきか」

実はこの一週間で鎮守府内の環境は大きく変わっていた。至る所が損傷していた建物はほぼ完全に修復されたり、最低限の量しかなかった食事も充分に出されるようになったりなど様々。これらの変化には二人の他に鎮守府に艦娘と共にいる「妖精」の存在が大きい。彼女達が何者なのかは定かではないが鎮守府や艦娘にとってはおなくてはならない存在である。

この妖精の存在に気づいた二人は鎮守府中の妖精に話しかけて事情を説明、その結果大量のお菓子（マルコが買ってきた）と引き換えに色々と頑張ってもらったのだ。そして今二人に報告したのもまた妖精だった。

「あいつらに信用してもらえたのは不幸中の幸いだったよ。本当に

頼もしい奴らだ」

「確かにそうだな。だが重要なのはこっからだろう、艦娘との関係はもうしばらくかかりそうだ」

だが何とかなるだろ、と白ひげはお菓子のついでに買ってきてもらった赤ワインを瓶のままラッパ飲みながら呟く。こればかりは力づくではどうにもならない事は二人とも理解している。だからこそ時間を掛けてゆっくりやっていくつもりらしい。

二人しかいないこの執務室は静かだったのだがそれは突如として鳴り響いた電話の着信音によって妨げられた。その音は執務室の固定電話から聞こえてくる。恐らくは軍関係の電話だろうが生憎この元提督はいない。白ひげは迷う事なく受話器を取る。

「俺ア白ひげだ。おめエは誰だ？」

「その声、やはり貴様かニューゲート!？」

その声の主は白ひげの古くからの戦友であり現在大本営で元帥を務めている男、センゴクだった。

「何十年ぶりだあセンゴク。相変わらず元気そうじゃねエか」

「そういう貴様は随分とやってくれたようだな。そこの提督は重症を負い憲兵達は一目散に逃げ出す事態。私がどれだけ後始末に追われたのか分かってるのか!？」

白ひげが着任（物理）したその日、部下から伝えられた用件はセンゴクにとって寝耳に水だった。それはとある鎮守府の提督が重症で軍の病院に搬送された事、駐屯していた憲兵達も逃げ出した事。しかもその原因がああ白ひげと分かった時はさらに驚かされた。

「グララララ、だがこのままアイツを放置しとくのとどっちがマシだった？」

確かに白ひげの言う通り今大本営では一部の鎮守府で艦娘への暴行や賄賂など腐敗が進んでいるところがある。鎮守府の腐敗は軍全体の指揮や民衆からのイメージ低下に繋がるためセンゴクは徹底して改善に当たっていた。

そして今回は予想だにしない事態で腐敗が発覚してしまったのだが。

「その身勝手さは本当に昔から変わらないなニューゲート。それで、そこに居座り続けているということはまさかと思うが……」

「ああそうだ、自分ここで好きにやってみようつもりだ」

「やはりそうか。まあそう言うだろうと思ったから手続きは既に済ませといたぞ」

というかそうする他になかった。いくら不正を暴いたとはいえあれだけの怪我を負わせて何も無しという訳にはいかなかったのだ。そこでセンゴクははじめとして白ひげを何とか着任させて艦娘との関係改善を求めるように仕向けたのだ。

だがわざわざそうしなくても白ひげなら十中八九提督になるだろうと予想できていた。

「気が利くじゃねエか。流石は知将「仏のセンゴク」だな」

「貴様とは何十年の付き合いだからな。ただし、やるべき事はしっかりとやっってもらうぞ。お前の仕事は提督としての業務を行いつつ艦娘との信頼回復に努めることだ。分かったな！」

「ああ、了解した」

ガチャと受話器を置くと再びワインを口に運ぶ。白ひげは特に何とも思っていないのか堂々としているが一方でマルコは少々苦笑いを浮かべている。

「まさかとは思ったがやっぱり面倒な事になったなオヤジ。まさかゼンゴクから直々に電話がくるとは」

「まああいつにバレるのは想定内の範囲内だったけどな、グララララ。マルコ、嫌ならお前は降りてもいいんだぜ」

「今更降りる気はないよ。それに俺は最後までオヤジについて行くって決めてるからな」

マルコにとって白ひげは本当の親のように慕っている。血は繋がってなくともその絆は何が起きても切れることはない。

これから正式に「提督白ひげ」として鎮守府を運営していく事になる。とはいっても当分は艦娘とのコミュニケーションが大半になっていくだろう、それだけでも充分大変なのだがマルコはこれに加えて書類を押し付けられて四苦八苦することになるのだがそれはまた別の話である。